

川柳大学文庫第3集

言葉たち

—新子語録

北川弘子
坂東乃理子
編

凡例

本文中の単語末尾に出典（時実新子著作）を略記号で示しました。その書名・出版元・発行年は次の通りです。

川柳展望	（創刊号 - 83号）	川柳展望社	一九七五 - 一九五五年
川柳秀句館	（川柳壇の十年）	編集工房円	一九八六年
句集・猫の花	（花の結び目）	編集工房円	一九八七年
花葉	（言葉をください）	朝日芸文庫	一九八八年
新子座	（新子の川柳行路）	文春文庫	一九八八年
新子座	（川柳新子座）	朝日新聞社	一九九〇年
新子座	（指先の恋）	文芸春秋	一九九〇年
新子座	（川柳新子座）	朝日新聞社	一九九一年
新子座	（遍路）	朝日新聞社	一九九一年
新子座	（時実新子のじくざく遍路）	朝日新聞社	一九九一年
新子座	（川柳新子座）	朝日新聞社	一九九二年
新子座	（あそびせんとや）	東京美術	一九九三年
新子座	（咲くやこの花）	中経出版	一九九三年
自分	（『自分、を生きる』いい話）	角川文庫	一九九四年
恋歌	（恋歌ノート）	朝日新聞社	一九九四年
新子座	（百色の毬）	朝日新聞社	一九九四年

想
添削

想夫恋 || 週刊文春川柳俱楽部秀句選
川柳添削十二章

女
添削

新子座
94

川柳ゆめ芝居 || 川柳新子座 94

東京美術
講談社

一九九四年
一九九五年

人
生

恋ごころが女の人生を変える

ネスコ・文芸春秋
講談社

一九九五年
一九九五年

再
婚

再婚ですが、よろしく

海竜社
講談社文庫

一九九五年
一九九五年

父
母

父さんごめんね、母さんごめんね

角川文庫
角川文庫

一九九五年
一九九五年

愛
情

愛ゆらり

ネスコ・文芸春秋
角川書店

一九九五年
一九九五年

入
門

新子流川柳入門
人間ざらい人恋し

大和書房
川柳大学

一九九五年
一九九六年

震
災

わが阪神大震災 || 悲苦を超えて

朝日新聞社
川柳大学

一九九五年
一九九六年

新
子
座
95

魔術師たち || 川柳新子座 95

月刊川柳大学
月刊川柳大学・別冊

一九九六年
一九九六年

大
学

月刊川柳大学

川柳大学
川柳大学

一九九六年
一九九六年

世
界

時実新子の世界 (月刊川柳大学・別冊)

講談社
川柳大学

一九九六年
一九九六年

キ
ラ
キ
ラ

時実新子の人生相談・キラキラ悩む

KCC
KCC
日常独話

一九九六年
一九九六年

日
常

日常独話

「新子の川柳教室」にて (採語)

一九九六年
一九九六年

序にかえて
心の枝に一つでも！

弘子さん、乃理子さん、膨大な資料の中から「新子語録」を拾い集めてくださつて、ほんとにごくろうさまでした。

「語録」なんて呼べるしろものではないので、文庫の書名は編集部に頼んで『言葉たち』にしてもらいました。

ゲラを見て、赤つ恥をかく思いや、うすもいろに染まる照れや、ぞおッと水色になつたりもしましたが、いずれも私の口が吐き、ペンが記したもの。目をつぶつて、観念して、弘子さんと乃理子さんの感性と作業に対して感謝することにしました。

ただ、ほんの少々、私のつぶやき（日常独話）を加えさせていただくことをおゆるしくださいね。

この『言葉たち』が、一つでも、どなたかの心の枝にとまることを念じつつ、もう一度お二人に「ありがとうございます」を申しあげます。

一九九六年初冬

神戸学園都市にて 時実新子

川柳に生きる

私の川柳の出発は主婦の座があつたが、文芸に関わるとき、私は一人の二十代の女であつた。（花）

川柳はどこかに素つとぼけた味があつてあたたかかった。私は人の情に飢えていたのかもしれない。とにかく「川柳だ」いいもの見つけた、と思つたのである。（自分）

課題吟を除いて、泣かずに書いた句は一句もない。波が来て、怒涛となつて、吐瀉せざるを得ない状態の中で、私は泣きながら川柳を書く。そこにだけ私の恍惚が存在した。（花）

川柳は私の恋人、私の目標、私の生命。絶海の孤島に放り出されようと、私の心の在る限り私の川柳は存在する。（花）

「伸びよ新子」私は明け暮れにこの言葉を復唱した。伸びて

もいいのだ。心を正直に出してもいいのだ。感情の激しさゆえに、短歌の老師から破門され、川柳もまたそうなるのではないかという怯えを、私はこの日限り振り捨てた。うれしかった。（花）

私が『新子』を出した昭和三十八年ごろは、句集のたぐいはノシをつけてもらっていたるもの、という風潮がありました。でも私は一冊として「もらつていただき」ませんでした。買われてこそその「評価」だと思つたからです。（入門）

句集『新子』がどこかで誰かの涙を誘い、その人の心へ深く届いてくれるのを何よりもうれしく思った。（花）

物を書く女、それは他のどの表現を生甲斐とする女よりも罪深い存在だ。これ程おそろしい迷惑をふり撒く表現は他に

見ることができないと私は思う。（花）

若い女性が裸で歩くのはその美において、まだ許される。それが中年、初老、死の直前まで裸で歩こうというのだ。生物の老化という避けがたい姿を衆目にさらす。それが、物を書く女の宿命である。（花）

私は川柳と結婚し、川柳だけを愛して生きた。いや、だから、川柳がなかったとしたら私の生は中途で断たれていたとさえ思う。（女）

私の一句は今日生まれるのだーそう思つて起床する。（花）

いのちの限り咲きつづける。ライバルは自分自身。誰それさんがどう言おうと咲き切つてみせる。それが私の川柳である。「いの

ち」が何よりも重く美しいものなら「川柳」もまたそうである。(花)

そうして今や川柳の魅力はいよいよ私の肉深くい込み骨に達した感じである。私はこれだけの幅と深さを持つ川柳の魅力を、何とかして一誌一望できないものかと思った。その中で互いの長所を認め合うところから個の確立を果たしていきたいと望んだ。(展望)

川柳展望は私の個人誌、新子一代誌です。(大学)

戦の恥、まちがいの部分こそ正直に書き残すのが今を生きる者たちのつとめである。(新子座89)

自分の句を読んで感動するなんて、考えてもおかしなことなのですが、私はたしかに未知の私と遭遇したのです。(言葉)

「川柳大学」には入学試験も卒業試験もありません。しかし、大きく学び育つてほしいものはあります。

それは「おもしろ」のこころです。文学・芸術すべての根源であるところの「おもしろ」は手強いですぞ。「川柳大学」はこれを求めつづけて波を蹴立てます。（大学）

私の視野は広大無限。これからは明朗に爽やかに、高く深い川柳世界を繰りひろげていきたい。（大学）

食うか食われるか。一ヶ月に拝見する句数トータル一万五千句。（大学）

私は私の「過去・現在」のすべてを傾注して選に当たる。
それしかない。（大学）

私の選句に人手は借りていません。粗選びで洩れたら大変ですから、ぜんぶ自分でやっています。（大学）

私は「桜の園」を一日二晩、つまり五十時間近くかけて選ばせていただきながら、ふつと赤ペンの止まつた句を書きだしていく。ほとんど眠らないので、どうもあの世とこの世のけじめがつかなくなる。あの世からは実にこの世がよく見える。生きることは死ぬこと。死ぬことは生きること。——つまり同じなんですから。（大学）

一句を際立たせるために、六句に死んでもらう場合もある
「川柳の森」（会員自選七句に寄せて）。（日常）

原稿書きに資料なし、下書きなし、締め切り無視で早すぎる送稿。すべて私の欠点。（日常）

私たちの書く川柳もどこかで誰かを癒すことができるとい
いですね。（大学）

「俺のいのちだ」「私の川柳です」と言い切るとき、川柳は立派な芸術であり、文学である。個に生きて、個の内面を告白する一人一人が集まれば、それが社会への告発となる。（花）

どうしようもない心を吐きつくす。自分の悪から目を外らさない。もちろん歓びの熱い涙も隠さない。そうやって書き継いでいけばおのずから川柳は自分史になっていくはずです。（新子座93）

平凡な市井の人たちの川柳が、その境遇ゆえに平凡でつまらないということは決してありません。主流はそういういた人たちなのです。（入門）

下手な人はどこまでいっても下手なのである。それでも川柳が好きでたまらないと言う。これも一つの天分である。みんな平凡な眼の持ち主なのだ。それが、ひよいとしたきつけ、アドバイスによって非凡に変わるトキがある。（花）

平凡を非凡に変えるのは、人の倍も三倍も人や事や物をみつめることである。心を隠さずに表白することである。その時、人には見えなかつたものが見え、人が感じないものを自分が捉えていることに気づく。正直に自分を出す。恥ずかしがらずに出す。裸になり切る。これがいつのまにか天分をつくり上げる。（花）

詩は別才にあり、というではないか。作らざる書かざる詩人がうようよと居る中で、書くという作業はこれもまた一つの天分である。そういう人々のためにこそ「川柳」は存在す

るのだと私は考える。ちょっとばかり小器用にまとめてみせるのは技巧であつて天分ではない。(花)

すべてが「私のために」存在してくれるのだ、ありがとう
という見方、自己中心といつてもよい物の見方こそが、川柳
の目です。(入門)

自分の中に自分という他人が増えるのは愉しい。(大学)

川柳は心に芽生えた針ほどの悪の芽も見逃してはいけませ
ん。針小棒大にそれを出してください。それが人の心を打つ
大きな力となるのです。(入門)

悪びれているのがよいこともある。(大学)

日記のようになに川柳を「つける」ことが身につきますと、なるほど川柳の技巧は日に日に上手になるかもしれません。でもそれは、ほんとうの文芸の姿勢ではないように私は思ったのです。

句は書きたいとき書く。

怒涛のように押しよせ、突きあげる感情のなかで書く。

生めるだけ生む。

何句なんて数など問題ではありません。怒涛がおさまるまで書けばよいと思います。（入門）

「自分の心の波」をみつめる姿勢をもつと大切にして欲しいですね。その波を、具象に託す。まず心から入って、具象へのいうのが順序です。（大学）

「書きたい」という波がこないときには小石をひとつぽーん

と放り込んで、自分で波を立てなくてはなりません。（大学）

たまに言いましょう、「ああ何てきれいな空でしよう」つて。そのとき私は空をほんとは愛していないことに気付く。川柳がスタートするのはそのとき。（日常）

「川柳大学」の表紙に描かれるヨセフ・片岡の世界。あのキャラクターに憧れる。ご用が済んだら一刻も早く行きたい世界だ。（日常）

現代川柳はまだ若い芸術です。

あなたが、あなたの個性で、あなたの川柳で仲間入りしていくださる日を、首ながら待っています。

それが川柳界の今のいちばん大きな希求です。（入門）

目を深く広く届かせること。好奇心をもつてのこと。つねに自分との対話を忘れないこと。なによりも川柳が好きであること。これだけそろえば、あなたは今すぐ川柳が作れます。（入門）

川柳をはじめてなるべく早い時期によき師とめぐり逢う人はしあわせです。文芸はもともと教えられるものでも学ぶものでもない、それはもう天分なのだという説を私も肯定いたします。

しかし、その天分を存分に伸ばすために、また迷いの出たときの方向づけに、あるいは人生をより幅広く深く生きるためにも、よき師、よき友との出会いは大切です。（入門）

川柳五つの事典

1 句会について

句会の長所は、何といつても耳から聴くたのしみがあることでしょう。活字とはまた異った句の味をたのしむことができます。自分の句がその場で評価されるわけですから、この即決性も魅力ですね。（入門）

忘れてならない礼儀として、選者の悪口はつつしみましよう。没の句にいつまでもこだわっては進歩がありません。でもあなたの「自信ある没句」については（仲間たちと）大いにディスカッションしてください。（入門）

初心者のうちは、句会であるひととのひとに会えたことを喜んだり、抜けたの没だのに一喜一憂なさるのも悪くないんですが、いつまでもそこから抜けられないようでは困ります。傲慢な言いかたかもしませんが「自分の敵は自分」「自分の気に入った句ができたときがいちばん嬉しい」、こうな

れば本物です。個人差はありますが、大体五年目あたりが正念場。作家になつていく人と、生涯趣味で楽しんでいこうとするひとの分岐点です。（大学）

2 川柳誌について

みんなで育てていく川柳専門誌です。師弟という縦の関係よりも、現在では横のつながりのほうが重要視されてきたと申せましょう。みんなそれぞれに個性を持つて研鑽していくわけです。一人一人が個を主張して、その個を認め合うところから「川柳」というジャンルの発展につなげよう、というのです。（入門）

3 推敲と添削について

もつといい言葉はないかと推敲するのは文芸の根本姿勢です。ただ、川柳のような一呼吸の詩型では、一気に吐いてそ

のままがよい場合もあります。あれこれ推敲しているうちに、句姿はなるほどよくなります。が、かんじんの訴える力がそれてしまふことがありますからです。でも、自分でどうも心にぴたりとこない場合は推敲を重ねることが大切です。（入門）

4 ことばとリズムについて

口語が基本です。しかし、韻をふむために文語を使うことも自由です。なかには口語文語とりませての句もあります。文字や言葉にできるだけ敏感になつてください。それが川柳を愛するこころなのです。（入門）

川柳にとつていいちばん大切なのは助詞の使い方でしょう。「てにをは」のことです。この一字ちがいは大ちがいでして、句が生きたり死んだり、意味がひっくり返つたりしてたいへんなことになります。（入門）

豊かなボキャブラリーとは専門用語を多く知っていることではありません。日常の、あたりまえのこと、物をよく見てつかむ表現の豊かさをいうのです。（入門）

あんまり専門的な用語の使用は読者を制限する、却つて表現の幅を狭めることになると認識していただきたい。（大学）

いつも感度のよいアンテナを立てて、すばやくキャッチしましょう。あなたの感性が言葉を生むのですから。その感性から生まれた句は、読んで目になめらか、聴いて耳になめらか、くちずさんでは舌になめらかである筈です。（入門）

「なめらかさ」こそが律です、リズムです。韻たるところです。一部ギクシャクと、こなれのわるい句もありますが、それは内容によつてわざとゴツゴツさせている技法でもあります

す。しかし、そういう句にもリズムがなければ散文なのであります。かならずリズムは持っています。これを内在律というのです。（入門）

5 時事と社会派について

時事吟とは、その時その時の社会的な出来事を句にするものです。瞬發的な花火とともに申せましょう。しかし、花火が人の心に残像としてとどまるように、ほんとうの時事川柳は、社会句としてながく生きて「当時をものがたる」大きな力をを持つものであります。

社会の流れを今生きている「私」が心の深くでとらえ、批評する。それが時事吟の長所でしょう。（入門）

初心の人に心していただきたいこと。題をよく咀嚼してあなたの個性を見せてください。技巧も大切ですが、まずは発

想です。誰もが思いつくことを安易に作ると、他の人の同じような句と共に倒れになってしまいます。あなたの句が抜ける（入選）とき、それはあなたの個性が光ったときなのです。

（秀句館）

第一発想を潔く捨てる。（大学）

決してうまく作ろうと思わないことです。できるだけうまく作つて大向こうを喰らせてやろうなんて企みますと、その句はコトバばかりがキラキラして、中味は何もない句になってしまいます。技巧の前に何よりも大切なのは心です。（入門）

句意を正しく伝えるためには漢字を使うことに横着であつてはならない。（秀句館）

川柳は季節に関係はないのだが、早春に「炎天」だの「秋わびし」などが出てくる無神経さはちょっとね。（大学）

スランプには鉛筆（大学）

題は「ヒントでピント」あまり堅苦しく狭義に考えすぎずに、単なるヒントだと考えればいい。（大学）

類想と類句について

作者としては自分の句であるという当然のことが、ある日突然「盗作」の汚名を着せられるることは耐えがたい屈辱です。そういう問題に出くわしたら、いさぎよく先に発表した人にその句はゆずりましょう。字句が異っていて発想だけがそつくりという場合も、内容が、大同小異なら、自句を没にするのが礼儀。どうみてもあなたの句のほうが優秀句だとい

う評価が得られれば発表してもよろしい。（入門）

ふざけた雅号は「あそび」とわかつていても、川柳に対する
軽視蔑視が感じられる。狂句時代への逆行も案じられる。

（日常）

人間の感情のなかで何がより強く人に訴える力があるかと
いえば、怒りと哀しみなのですね。喜怒哀楽の怒と哀です。

（入門）

川柳を生み出すのに、この怒りの感情は起爆剤となってくれ
ます。私など、怒らせてくれる事件があればそれこそ怒涛
のごとく句を作ってしまします。そうすることがカタルシス
になるのです。

（添削）

どうすれば喜びや楽しいことを川柳にして、他人にも感動してもらうことができるでしょうか。それには「物」を媒体として、あるいは「事」を具体的に入れて、読み手にも喜樂を共有してもらうしかないようです。（入門）

よい句とは一読ぱつと絵が浮かぶもの。たちまち掌篇小説が書けるもの。（大学）

「うれしい」「かなしい」も、たとえばリング一つ、センベイ一枚、犬や猫、金魚やメダカに喋らせれば、共通の視点を読者に届けやすくなる。（大学）

川柳はなるべく動作を出して言葉をかくしたほうが、いきいきしてくる。（添削）

伝えることに重点を置くあまり、大衆を低俗と見る傾向はぜつたい避けねばならないと私は思っています。大衆とはおそるべき知的集団です。まちがつても大衆を軽く見て低俗な川柳を世に示す愚をかさねてはなりません。（入門）

ほんとうにいい句は、さッと生まれて姿崩さず、てにをは一字さえも動かせぬ緊張と深みと、ふくらみを有するもの。

（展望）

五年経つても自選のできる人は数えるほどしかいない。それは自分を他人視するきびしい目の欠如からきているようだ。（結び目）

川柳は格言ではない。したがつて人生訓を敵とする。句によつて訓戒を垂れようなんて考えないことだ。（展望）

川柳は心に正直に、原則として現在地のリアルタイムからの発信をよしとする。（大震災）

川柳は本来、客観の芸術で、自分を他人視するつよさとクールさを持っている。具象のまったくない抽象句は主観に傾きやすい。主観、もとよりあつて当然だが、それを他者へ伝えようとするなら、概念や観念だけでは「そうですか川柳」に終わってしまう。まずはもう一人のあなたを作ること。もう一人のあなたがあなたに甘くては困る。しつかりとあなたの中のもう一人のあなたを感動させることで初めて自選は成る。（大学）

同レベルの入落の分かれ目は作為の有無にある。うまい句、即ち佳句ではない。自分の言葉で熱く直截に訴えているか。あるいは冷たく突き放しているか。要はそこにある。（新子座94）

六つの気球——現代川柳へ

一、危機感——生そのものへの危機感が愛を生み育てる。

二、訴求力——川柳はもつと泥くさく真心を叩きつけるような一本氣があつてもいいのではないか。

三、意味性——伝達しようとする意思（意味）を忘れたとき、句は人の心を素通りする。

四、意外性——意外性は、ともすると「奇を衒うこと」に墮ちがちである。要は、自分の眼と心で物の本質を見極めるのだ。意外性とは個性の発見である。

五、あそびのこころ——私は自分の川柳に酔いながら、それを他人扱いすることで心ゆくまであそんできた。ユーモアとペースス、非情と有情、叶うなら高度のユーモアにあそびたいと願つてきた。ユーモアとはふざけではない。一番ふさわしい姿を考えよう。一句一姿、それは作家の基

本姿勢である。（展望）

私が現代の川柳に求めておりますその一は、「危機感」です。これは全く本能的といつてもいい私の、文芸全般への希求であります。危機ではありません。危機を予知する緊張感とでもいうべきものです。言いかえれば感度のよいアンテナを持ちつづけるということです。

幸福のまつただ中で不幸を予知するのは作家の鋭い感受性にほかなりません。（入門）

「句とは／十七音字に／ちぢめる事／ではなく／十七音字に／ふくらむ事／である。」（川上三太郎単語集より）省略はわかるが「ふくらむ」は難しい。十七音字をふくらませるのではなく、ふくらむというところにカギはありそうだ。

（秀句館）

川柳は「一句一訴」。くどくどは駄句。（日常）

川柳の姿は原則として「棒」です。どこも切らない、どこにも点を打たない、字空けもしない。色紙に書いたりする場合には、見た目のバランスがありますから三行に分けて書いたりしますが、原則は棒。曲がりくねつたりしないんです。

（大学）

省略すること。これは短詩文芸の基本です。（入門）

マリは圧縮しきつたときにはね返す力もまた大となる。川柳は十七音字しかない文芸だが、それゆえ無限の表現を得ることができるのである。（秀句館）

大切なことを一つだけ申しあげておきます。五・七・五の

頭、つまり上五は少々重く頭でっかちになつてもかまいません。下五も一字ぐらいのはみ出しあけつこうです。かえつて句に重みがついたりしますから、それは高度のテクニックとしても使われことがあります。

ただし、中八や中六、中五はいけません。なぜ中七だけやかましく戒めるかと申しますと、中七のリズム無視は、句の柱を歪めて読み手の感受性を挫くのです。中七は川柳という文芸の柱です。（添削）

続・六つの気球——現代川柳へ

一、伝統と革新＝川柳という文芸を愛することに伝統も革新もない。「深く根を踏まえて日々新しくあること」への精進だけである。

二、難解性と伝達性＝平明にして深くある作品は難解でもなければ低俗でもない。そして、よく伝達する。

三、鑑賞と選者＝もつとも危険なのは、思い上がった訓導型選者であろう。彼らは己が世界だけを世界とし他に興味を示さない。悪を許さず、死を忌み嫌い、糊塗した道徳と作り笑いをよしとする。おそろしいことだ。（鑑賞者またしかり）

四、川柳の詩＝巨視的な目でみれば詩にはすべての文芸が包まれる。川柳も詩である。川柳の中の詩は、何よりも人間愛に裏打ちされたもの。要するに、川柳の詩は心象風景であるともいえよう。そこはかとなく景色が見えてくる川柳、ことばの向こう側に搖曳するものを捉えて、川柳の詩と呼んでもよいのであるまいか。

五、連作群作＝一連には起承転結が組まれるべきであり、主たる句をより生かすために、弱く未完成ながら主題を引き立てる役目をもつ句を挿入してもよい。私はこれを捨て句と呼び、主役の句同様に大切だと考える。

六、作家の生涯——三橋鷹女は晩年の作品の中で老いを直視した。女性にとつては殊更に酷な課題を自分に課したのである。強靭な精神力と、詩神に対する真心であろう。
私もそうありたい。（展望）

よい読み手に出会つた作品はしあわせだといわれるのも、短詩文芸の場合、小説などと異つて、作者と読者とのお互いの感性がひびき合つて価値づけられるところが多分にあるからです。「鑑賞もまた創作なり」といわれる所以でもあります。（入門）

理屈や語の解釈に頼る読み方は短詩文芸ではマイナス。感性でキャッチすることが大切だ。（入門）

短詩型作品を読み取る感性を持つていていることだけでも大き

な才能ですよ。（ＫＣＣ）

作者と読者の車間距離は大切。あんまり土足でズカズカはお断り。（日常）

「わからない」には作者側がひとりよがりの観念句を出していいる場合と、読者側に句意を読み取る力が不足している場合とがあります。作者即読者、読者即作者、これも短詩型の宿命として、どちらもわるいことがある。（大学）

なんでもすぐに「わからない」と放り出すのではなく、近づけるところまで近づいていこうという愛情を持つていただきたい。いい読者であるということは、いい作家になるための勉強でもあります。（大学）

古川柳の時代と現代川柳が大きく異なるのは作者名がどこまでもついてまわる点である。（花）

個性というものは、作者も読者もうんざりするほど同じテーマを追求して深めて、はじめて出てくるものだと思う。それと、決して堂々めぐりをしているのではない、というあたりもわかつてほしい。（展望）

個性はながい歳月をかけて、ちょうど果物が発酵して美酒となるように、自然にかもし出されるものなのです。

個性個性と求めるあまり、何でもかんでも人と反対のことをして奇人ぶることは愚かなことです。（入門）

自分で気付かないのが個性。（大学）

「ひらきなおり」は弱者のトリデ。そこから出発して「笑いのめし」ができるようになればしめたものです。
川柳の個性の根っこはこのへんにあるといつても過言ではないでしょう。（入門）

一人一人の個性をみつけ、それを伸ばす。これが文芸を指導するという、唯一の姿勢ではないでしょうか。（入門）

川柳は「もう一人の自分が自分を見る」という自己客観の文芸である。社会性を云々する向きもあるが、自己告発のできない人にどうしていきなり社会告発ができようか。もしどきたとしてもそれは単なる「あげつらい」か皮相的な「からかい」でしかないだろう。しっかりと個に生きて、その個が座となり衆となつたとき、初めて社会が見えてくる。

（新子座92）

作家の開花期というのは、せいぜい十年ほどではなかろうか。多くの芸術家にそれが見える。雌伏の歳月があつて芽吹いて花ひらいて十年。わずかに十年なのである。よほどの気力と愛でその十年を生き抜かねばならぬ。（展望）

芸術は創作であるという大義名分があります。川柳という文芸も例外ではありません。（入門）

文芸は夜生まれる。

つまり、心の中に夜（ひとりの世界）を持つことが大切です。目をつむるだけでも夜は作れます。（入門）

文芸には適当に不幸で適当に幸福だという土壤が必要である。欲を言うなら少し不幸サイドで生きることは更に得難い文芸の土壤である。（自分）

少なくとも文芸を志す者は、文芸の世界で遊ぶべく選ばれた人であることを自覚しよう。文芸に日常報告をしていたのではその価値はゼロである。（大学）

作家とは微量の毒に働き動かされ、それを形にし、文字にする人たちの呼称である。川柳も例外ではない。（展望）

からだのことを句にするのは難しい。けれどもわれわれは作者である。作者はすべての事象から材を取ろうと試みるものである。（咲く）

ものすごい嫉妬。だから作家なのだけど。（大学）

川柳に限らず文芸というものは事実と虚構のはざまにキラリ光る真実を掻むものである。それがなければ報告であつて

文芸ではない。（新子座90）

否定も肯定もしていない作者の作品こそ逸品。（大学）

文芸にフィクションは必要ですが、真実のともなわない虚構は人の心に感動を呼び起こす力を持たないでしょう。

どんなに才能にすぐれた作家でもオールフィクションはあり得ません。人の感動を呼ぶには事実が三、フィクションが七。そのときはじめてその文芸は真実性を持つのだと耳にしたことがあります。オールノンフィクションもまた厳密にはあり得ないでしょう。（入門）

「正直」にということにこだわると陥りやすいのが「報告川柳」です。虚と実といいますか、事実にフィクションが入つたとき、初めて「真実」になるということ、事実と真実の違

いというものを、どうぞご理解ください。（大学）

文芸とは、そもそも神さえも引きずりおろしてしまうもの
です。（入門）

芝居を観ても映画を観ても、実人生とかけはなれているほど
おもしろい。自分とよく似た世界には共感はあっても感動
はうすい。「身につまされる」共感は人生の躍動源とはなら
ないものでしようから。（入門）

平凡な明け暮れの中で、ともすれば涸れそうな詩の泉がふ
つふつと湧いてくる。ひととき心遊ばすことができる。非日
常への逃避はカタルシス。遊んでいる己に、「へえ、こんなこ
とを！」という自分発見の楽しさが生まれる。代替願望も満た
される。それが読者に「おもしろ」を感じてもらえるとした

ら、まさに作者冥利に尽きるというものではなかろうか。

（新子座95）

世の中にバカ話とムダ話ほど貴重なものはない。それを軸に私はエッセーを書いている。句においても同様である。

（大学）

生きている今、リアルタイムを赤裸々に吐き尽くそう。そのとき川柳は百句百姿の「おもしろ」を見せて、座、いよいよ活気付くに違いない。（新子座95）

私は「川柳新子座」の作品レベルは、現代川柳の上位にあると自負している。「これが現代の川柳です」と、どこへ出しても恥じるところはない。しかし、芸術は死ぬまで修業。川柳とて例外ではない。座長として、しつかりと目を据え、

励むかくごである。（新子座90）

自分を曝すのは苦手だ、それよりも時事や政治に興味があるというお方はそのほうへ進まれたらよいと思います。川柳新子座は人間を求めています。個に生きる人の真実（事実の報告ではありません）を求めつづけています。（新子座93）

「常識を脱けましょう」「半歩よ、半歩出てみてください」と言いつづけてきたが、その言葉を、ちよいと空へ放り上げてみる気になつた。

「半歩」は難しい。自己確立のできていない段階でこの言葉に引っかかると、いきなり飛んで姿が見えなくなる。時期を待とう。（大学）

高度なユーモア、それからエロス。このふたつほど難しい

ものはない。わたしにとつても永久の課題です。（大学）

現代川柳のユーモアの基本は「自分を笑うこと」なのです。他人を嘲笑することがユーモアだなんて思つたら大間違い。あくまでも「自分を笑う」のです。怒りの頂点や悲しみのどん底では、涙も出ない、もう笑つてしまふじゃないですか。

（大学）

「川柳つてもつとオモロイもんやおまへんか」「ここで一句ひねつてください」——聞き流しておこう。しかし、心にはとめておこう。ユーモア精神と瞬発力は大切だから。（日常）

川柳は残念ながらまだ近代批評の洗礼を受けたことがないので、ちょっと傷口に触れられると人生の一大事のごとく血相をかえます。まあ、徐々に大人に育つていくはずですから、

どうぞ口角泡をとばしてください。（大学）

「川柳は十七字」なのではなく、

「川柳は十七音字の詩型」なのです。（入門）

詩は、詩の衣を着て歩いてはおりません。路地裏の、ゆうぐれの、電車の吊革の、そんなところにいっぱいあるのが詩です。そういう意味で、川柳は詩なのです。（入門）

詩はそもそも弱者のもの——という概念があります。

ポエジーは弱い者がお好き。そうでしょうか？

“詩は川柳ではないが川柳は詩である”

そうなんです。川柳は巨視的に見て詩なのです。でもそれは、いわゆるメソメソとした詩情を好まないので。自分のウイークポイントをよく心得た上で「ひらきなおり」「笑いの

めし」、川柳はかんらかんらと歩いていくのです。（入門）

私は女性作家の増加に一抹の危惧を持つているんです。抒情が蔓延して濡れティッシュみたいになつては大変だと。川柳のカラッとした笑い、したたかさ、乾いた抒情、客觀性などが押し流されはしないかと。だから折あるごとに警鐘を鳴らしています。（大学）

川柳は元来、俳句に較べると一見棒のような姿をもつてゐる。表現が直截、ストレートなのである。しかし、それは姿であつて、内容的にはむしろ多角的なものが曲折してひそんでいることが多い。（秀句館）

ここで少し、川柳と俳句について考えてみたい。現代川柳と現代俳句は近来ますます接近して、作者名がなければ見分

けがつかない作品が多い。

それも俳句側では川柳が勝手に近づいてきたと言い、川柳側では季題を捨てた俳句こそ川柳に近づいてきたのだと言う。

大分前から柳俳無差別、短詩無性論も出ているが今のところ、私はまだ川柳と俳句に（そのちがい、その個性に）大きなこだわりを持っている。（展望）

ではどこにポイントを置いて俳句と一線を画するかといえば、それは発想の目（こころ）にある。句材を捉えるときの目が俳句ではなく川柳であること。即ち、人間がクローズアップされていること。その人間は「私」であること。私は大いなる批判精神の所有者であること。これさえ忘れなければまちがつても川柳作品が俳句にまぎれ込むことはない。（展望）

要するに俳句では人物（主観）が遠景に在り、川柳ではク

ローズアップされる。それだけにアクも強く品下る感はまぬがれないだろうがそれを誇りとしたい。

何よりも違う点は「発見」の目にみると私は思う。川柳人の目玉は魚眼レンズ。諧謔の角度を素早く捉えてしまう。

それは物に対してもそなだが殊に事に対して、自己を投影させ投入する。他人事でも自分の事でもいつたん嚙下してから素知らぬ顔で吐き出すのが川柳である。（花）

私は川柳は川柳でありたいとする有性論を支持する。川柳が川柳であろうとするなら、その特色を色濃く持たねばならないだろう。（展望）

その一つの特色として私は川柳の「いじわる精神」をあげた。俳句が十の力を七に抑える余情と知性を尊重するなら、川柳は十の力は十二にもと、渾身の力で振りおろす斧の一撃

である。その切り口のヒリヒリとした痛みこそが川柳である。いじわる精神は自分を客観視する強くて冷静な目をもつ。ただし、いじわる精神は愛に支えられる。やさしさに裏打ちされるものでなければならぬ。（展望）

俳句は題を出さない。川柳も「雑詠」と称して無題へと移行している。そうした流れに逆らってなぜ新子座は題を出すか。それは、こうしたマスコミの場合、雑詠を募集すると、時事に片寄ったり、トリビアリズム（瑣末主義）に陥りやすいからである。新子座は初めから文芸としての川柳を目指してきた。その手がかりとして題は誘いの水になる。題に思いを集め、己を投影する作業が行われるとき、自然に文芸の香りが立ちのぼってくる。（新子座95）

川柳には「なるほど」という感じ取り方もある、それも

またよしとする。「みつけ」「なるほど」は深い一句には届かないうらみが残るけれど、川柳の軽い足さばきは古来から特徴の一つとされ、これはこれで味があるのである。

(新子座89)

古川柳以来の伝統的川柳観では「穿ち」^{うが}、「軽み」、「笑い」を三要素として重視する。が、複雑、進化した現代人の心をこれだけで表現することにはムリがある。そこで現代の川柳は、喜怒哀楽のすべてを存分にうたうようになつた。一切の制約を自分から解き放して表現する——その自由さを川柳の武器としたい。(秀句館)

川柳は今、世の中へ向けて大きく羽搏こうとしている。作者即ち読者、読者即ち作者という短詩型文芸の宿命が破られようとしている革命期なのだ。

まずはわかつてもらうこと。感動を与えること。そして愛される文芸たり得ること。そのためには妥協する必要はまったくないが、川柳人同士にだけ通じ合う隠語めいた言葉あそびからは脱却すべきである。（新子座92）

下手でいいから存在感のある役者を私は求めて いる。

（新子座94）

愛と人生

人が人を好きになる。——この煩惱にまさる煩惱を私は知らない。そうしてそれは、避けられない天災のようなものだ。

(愛)

愛つてものは天から降つてくるのだ。チャンスはかならず天から降つてくる。それを、あなたがつかまえたときから、愛は「縁(えにし)」となるのである。(指)

つかまえ方はただひとつ。どんなに欠点だらけの男性でも、好きでたまらないところが一点あれば、よしとすること。

(指)

男と女の愛は奪いつくすところにその本質がある。

(新子座
89)

恋ほどの嘘つきは見当たらない。もしも正直を貫いたらどうだろう。世の中の大半の恋愛は瞬時に消滅するにちがいない。自分を騙し騙し、片目も両目もつぶつて許し許されるときのみ、一対のカップルは誕生するのである。（新子座89）

あらざらむこの世のほかの思ひ出に

いまひとたびの逢うことものがな

和泉式部

私は和泉式部、とつぶやいただけで熱い血が全身にあふれこぼれる思いがする。それは、時代の差、歌と句の差、何よりもその才の大差を別にして、あまりにも相似した心情を式部の人生に見るからである。

多情多感、浮気女、尻軽女などのうしろ指に毫も屈せず、式部の歌が位高く存在するのはなぜであろうか。

それは式部がいつ、いかなる時も、自分を偽らず忠実に生

きたからだと私は思う。

私はながい間、久女に擬せられたり、与謝野晶子と称せられたり、あろうことか卑弥呼と蔑称されたりもしたが、誰ぞこの和泉式部になぞらえてはくれまいか。

その才、天と地のひらきがあるにせよ、その心は式部に一番近い気がしてならない。(恋歌)

一人の女が、あるいは男が、異性を好きになるについて、他人の評価は無用である。理屈も条件も介在しない。好きなものは好き、嫌いなものは嫌いという単純な感情が、それゆえに美しく存在するだけである。(花)

指のキズの痛みは指を切った人にしかわからない。ついでに言えば、指を吸つてくれたからって、その男があなたを愛しているとは限らない。生来血の好きな奴もいるのよ。(日常)

次から次へと、返し縫いのようになるとざれることなく恋をしていくのが女というものなのである。（人生）

女の恋が返し縫いなら、男の恋は平縫いである。恋と恋の間に恋人のいない時期がある。浮気をする動物なのに、女のよう恋の相手となるスペアはつくらない。なぜなのかなあと考えてみるが、結局、男は女ほど狡くはないのだろう。

（人生）

ゴールのない恋のゲームでは後からスタートを切れば切るほど、優位に立てる。恋は鮮度がいのちなのである。（人生）

恋というものは、互いが互いに失望し絶望してのち、ほんとうの姿を現すものだ。それでもなお、いかなることも許せるとき、恋は初めて「愛」と名を変える。愛に到着しないま

でも「情」は生まれる。情を持続することは花火のごとき恋に燃えるよりも、人間として大きく深く美しいことだ。（女）

愛とは確かめがたきもの。みつめるほどにその形ぼやけ散るもの。（大学）

愛する者との同時絶命はかなえられないとしても、世界のどこかの、誰かと同時はかなうのだと。それを浅からぬ縁と思いたい。（大学）

男と女が仲良くなつて妬いて妬かれて飽き果て西と東へ別れ行く。そのあと二人はどうなるのだろうか。

「落ち葉の舞い散る停車場に」よく似た女が集まつて嘆き悲しむと思つたら大間違いだと私は思う。別れた女にはグミの実の小籠があれば足る。その実をひと粒含むごとに女は過去

を消していく。

気の毒なのは男である。飽いた筈の女がおんぶお化けとなつて、その日から男を苦しめはじめるのだ。（言葉）

「好きだったの、あなたを死ぬほど好きだったの！」——過去形って卑怯で美しい。（大学）

仏さまも目をつぶつてくださるわ。執念深く人恋い給え。

（大学）

男と女の別れなんてあなた、血みどろであたりまえ。いくらさつぱりした気性の人でも顔がむらさき色になるものなのだ。（新子座89）

男と女は相照らしながら向上したり墮ちたりする。（大学）

恋に関しては男は仕事と両立させるものだということが年を取つてからわかつてきた。（新子座89）

恋と結婚はまったく異質のものだ。結婚は、愛がなければ持続しない。（人生）

美しい少女は、それだけで孤独である。（新子座89）

れんげ畠は私の性のふるさとであり、希求でもあつた。

（新子座89）

夢を形にすれば、私の場合は桃になる。夢に道づれはいらない。

（新子座89）

女は男から言葉や愛をふりそそがれることによつて、美し

くもなれるし、眞の幸福をつかめるというのが私の持論である。（人生）

女は、たとえそれが好きでもない人であつても求愛された誇りを生涯忘れないものである。（言葉）

私はいつだつたか「言葉をください」と祈つたことがある。女はそのひと言を支えに生きていくのだから「言葉をください」。（言葉）

愛されているほうがメリットがあるようみえて、肝心のこころはうつろである。ほかに愛するものを探そうとする。相手の愛情をうとましい、わざらわしいとさえ思う。自分が愛していなければ、相手の愛情はかなしいことに何の意味も持たない。（人生）

愛は情に移る。情はこよなくやさしさに満ちたお節介屋だから、またしても人間を卑屈にさせやすい。

私はこの卑屈を素直という字にすり替えてうすく笑い、うすく泣いてこの七年間を過ごした気がする。（女）

女が昔を語らない——には理由がある。つまり女は、しおつちゅう会つていないと友情が持続しないので、女に「昔」はないのだ。（愛）

男にとつても女にとつても、異性のともだちのほうが樂しいし、信頼できる。異性のともだちには、もう一つ、大きな魅力がある。それは、男と女の間の友情には同性のともだちとはちがつて、恋が混じっているからである。（人生）

男というものは、本質的に征服願望が強い生きものだ。自

分よりもちょっと能力の劣るかわいい女が好きなのである。逆にいえば、自分よりも優れた女を苦手とする。(人生)

かわいい女を演じておればかわいい女になれる。(キラキラ)

私は大木がどうと波打つて倒れる姿が好きだ。あれは男の倒れざまだから。(新子座89)

私は斜め上ぐらいで男性をふり仰ぐのが好きだ。それは男性のこともあるが、博識にして公平な思考力を持つ男性の中身を尊敬しているから。(愛)

心の中に相手を縛りつけないで、解放する。ちょうど牛を野に放つように。(キラキラ)

私は彼女を知りません。でも、彼女の心はよく見えました。

(大学)

猫も女も家につくもの、犬と男は人につくもの。しかし、今や猫も女も簡単に家を捨てる時代になった。(新子座89)

健康美というのはあっても健康なエロスはないの。エロスは常に不健康。(大学)

鋭角な男を受け入れること、受け皿であることはけつして敗北ではない。動き回る性を、どっしりと落ち着いて待つ。これがどうして敗北なのか。

受け身の性を持ったことに、女たちはもつと誇りをもつべきである。受け皿になりうるのは、女が大きい性を持つているからだ。それに比べて、男の性は小さくて気の毒だ。せめ

て自由に動き回らせてあげなければ。（人生）

私はずっと女性は月の性だと思つてきました。太陽、つまり男性がしょぼくれていたのではつまらない。そしてこの摺理は決して敗北じやないと思つています。（大学）

生理日は私にとつて喜びの到来であった。「ありがとうございます」と合掌せずにはいられない。女がもつとも女である数日をなぜ女性は厄介がるのであるか。

杏咲く自愛極まるわがメンス　（言葉）

女は化粧をしてはじめてくつろぐ。素顔がくつろぐという人もあるうが、私はそうは思わない。手順をふんで身じまいをすることで「自信」がつくような気がする。（言葉）

食事というものは誰かのために作り、誰かといつしょにいただいてこそ「食事」というのですね。（愛）

人と人は近くにいては恩愛(おんざい)は見えなくなるものである。遠くにいる人の方が恋しいのも直接のぶつかりあいがないからだろう。（愛）

夫という存在は、別居していようが入院していようが、この世にいるというだけで大きいのだなあと、思い知らされた。放たれて自由になつたはずが、妙にスースーする。（女）

夫婦も鏡です。（大学）

まつたく私も含めて主婦は平然堂々と布団を干す。妻の当然の行為とばかりに。ところがこれも見方を変えればすごく

破廉恥な行為ではないか。（大学）

人間が人間を産むということは、大変なことである。結婚もまた一大事のはずなのに、軽々と女はそのハードルを越える。（女）

私はほんとうの愛とは一対の男女として向かい合う時に、男のステテコ姿を愛せるかどうかだと思う。（キラキラ）

もつとも醜いところを見せ合うのが夫婦だとすれば、ほんとうに人生を生きた重み、醍醐味を味あわせてくれるのが結婚ではないかしら。（キラキラ）

結婚。ましてや老婚は、いうなればさわり合うためにあるのだ。肌のぬくもりを分け合うために結婚するのだ。性を脱

出してからあとのスキンシップこそ大切なのだ。それなのに
……。（人間）

縛られて落ちつく。縛られて初めて自由にはばたける。こ
とばも私もそれを面白がつていてるかに思える。（再婚）

女は産みの性をもつゆえに、自分のからだを通過してこの
世に存在する者に対する執着が強い。そのくせ母と娘は愛憎
はなはだしい関係にある。同性ゆえの葛藤は嫁と姑に代表さ
れるが、血を分けた母と娘のそれは更に深刻である。殊にも
異性が介在する場合の娘の母離れはみごととしか表現できな
いものがある。離れながら放せない血というもののかなしみ
を女は産みつづけるのであろうか。

母に勝つために母から生まれたる 新子

（言葉）

私はたとえば娘が耳が痛いと訴えればたちまち耳が疼きます。息子が喉が痛いと聞けばすぐさま私の喉もヒリヒリします。現在もそうなんですよ。（世界）

子供って、三歳までにその性格が決まってしまうといわれます。だから自立心を……も当然の親心ですけれど、十分なスキニンシップで、少し甘やかしすぎかな？と思ふぐらいでちょうどいいのですつて。親の愛情をからだいっぱい、心いっぱいに受けて育った子は他人に対して思いやりのある、やさしくて強い子になるそうです。（指）

自分の写真は自分が見るもの、子供の写真は親が見てたのしむもの、孫の写真は一族でよろこぶもの。何で他人がうれしがってくれますか。（言葉）

女の子も男の子も、わが子の可愛さに変わりのあろうはずはないけれど、女の子を生むということはライバルをこの世に一人ふやすことであり、男の子は恋人を生むに等しい。

(再婚)

私は子供に親孝行の期待をしたことがない。子供の親への孝行は五歳までで十分だ。あの可愛らしさ、あの愛くるしさを提供してくれただけで、もう十分である。(愛)

私はよく思うのだ。娘や息子が年ごろになつたとき、そう、十八歳から二十歳のいちばん人間が美しいとき、わが子に惚れない親がこの世の中にいるだろうかと。(新子座89)

私はある意味で、少年期、青年期、壮年期に親を喪つた人をしあわせだと思う。子としての自分が齢を加えるにつれて、

親との別れは身にこたえてくる。（言葉）

子育ての最中ならそのことで気を取り直すこともできよう。また、自分が青春のただ中なればめくるめく愛が忘れさせてもくれよう。だが、身を枯野に置いての親の見送りは身を囁み心をさいなんで、想像するだに怖じ気づく。（言葉）

人は、親に死なれるところも自分の輪郭が鮮明になるものだろうか。黒い切り絵のようにくつきりと人生から切り抜かれた五体がヒリヒリと痛い。防波堤がとつぜんかき消えて、一步踏み出せばそこはもう海（死）という感覚も、私にとつては初めての体験である。（父母）

家族というのは、もっとどころどろしたところで恥部を見せ合い、共通の秘密を守り合い、触れ合いさわり合うことで匂

いさえ頌ちがたく同一化していくものではないだろうか。

(父母)

わるくちを聞くとき、とてもこころよいと言えば品性を疑われそうだが、「この人はわたしを信じてここまで喋つてくれている」と思う。その信頼されている感じがこころよいのである。私はぐいぐい相手に惹かれ、私も負けじとわるくちを言う。解放のひとときだ。ここから友情はスタートする。

(女)

人の不幸をよろこぶといういけない心がどんな善人にもひそんでいるものだ。不幸な季節に降るほどの親切を注いでくれる人は、ちょっと警戒したほうがよい。そういう人はあなたが幸福になるやいなや、ぶいっとそっぽを向く。(女)

落ちこんでいるとき一緒に落ちこんでくれる人がともだちである。もしも話しかけるなら、自分の不幸な話をしてもあげよう。そんなわざとらしさがいやなら黙つて遠くから見ていいだけいい。（女）

病むともだちの見舞も、よほど回復するまで行かないことだ。とくに女性は化粧もできぬ、白髪も伸び放題、入れ歯ははずされて……、そんな姿は誰にも見られたくないはずである。どうしても行きたいなら、自分もスッピンで口紅もつけず、髪はざんばらぐらいの心づかいをしてほしい。（女）

ともだちとは、一夕にして仇敵に変わる要素も含んでいるものだ。（女）

観音さまはあまねく衆生にやさしくて、だがら物足りない

時もあるわけ。観音さまは、だからちつともやさしくないと
もいえるのです。（大学）

あの世の人はいくらでも話を聞いてくださる。死者が日に
日に美化されていくのはそのせいです。（大学）

「美しく老いる」という言葉が私はきらいだ。（女）

どうして母親というのは老いるにつれてあわれになつてい
くのだろう。（大学）

若い人の中には老人を「老人」という特別な人種のよう
に括る人がある。誰が初めから老人であるものか。老人の胸の
うちには青春の血も壮年の血も現存しているのだ。それらが
発酵し練り上げられて、完成に近い人間になつているのだ。

尊敬に値する存在なのだ。（人間）

人の生に幼年期、思春期、青年期、中年期とあるなら、老
年期までたどり着いたことは至福といってよいだろう。（自分）

テレビや老人ホームなどで連発される「おじいちゃん」
「おばあちゃん」に私はとても腹を立てている。人には名も
あり姓もある。（自分）

家庭でもそうだ。子どもが生まれたとたんに、親をおじい
ちゃんおばあちゃんと呼ぶ。そう呼ぶから親はどんどん年老
していくのだ。言葉には言霊がある。（自分）

年を取る。どんな小さな美にも心をとめるやさしさが加
わってくるのと同じ歩幅で一日一日が重くなっていくようで

ある。これは死というものが確実に近くなつたことだといえる。(言葉)

年を拾いながら次第に華やいでくる、自分の孤独に驚くのである。さびしさに強くなつた。したたかなもの、悟りのようなものが、逆にまわりを明るく照らすということも考えられるが、これは一体何であろう。(花)

親たる人の禁句として最悪のものは「邪魔」だから「死ぬ」だ。子の身にもなつてみなさい。(大学)

人は、男と女とは、ましてや夫婦は、骨になつて初めて誰憚ることなく性の歓喜に酔うのではないだろうか。年齢も肉も超越した眞実の結合が待つて いるのだとしたら、骨になるのも悪くない。(父母)

夫を恋人と思つてゐる時代、深く愛してゐる時代、子どもを間にはさんで情によつて結ばれる時代を経て、「ああ、人間なんだなあ」と、生きる悲しみを共有するときがくる。そして、それぞれの時代にそれぞれのよさがある。（人生）

私は毎朝弁当を作り、川柳大学の事務所へ出かける夫を見送る。〈生きるかなしみ〉がふとよざるのを感じながら。

（世界）

人生つて、とにかくさびしい。それゆえに味があるのかもしれないけれど……。（言葉）

人は怨念のみに生きることもできる。少なくとも私は三十年を怨念に生きた。（新子座89）

なるほど私は激しくて怖くて強いところがある。

しかしそれは、辛抱に辛抱を重ね、湖のごとく涙を溜め、何べんも死んだあげくの所産である。泣き虫弱虫の開き直りの八方破れのものでしかない。（世界）

五歳のころだつたと思う。私は何か巨きな力を五体に感じた。その「力」に対して幼い私が手を合わす。長い祈りをつぶやく。この光景は家族にとつてよほど奇異に映つたと思うのだが、海に向かって、寝床の上で、私は所かまわず「巨的な力」に祈りを捧げた。そうすることによつてしま安心できぬわざか五歳の魂を、私は今、客観的に見て哀れと思う。しかも現在、私はまだこの「力」から解放されてはいない。

（花）

「生かしていただいている」という感覚が常にあつて、なぜ

左手が出ると右足が出て歩けるのかと、道の真ん中で立ち止まることもしばしばだった。（大学）

少女時代の私は、舟虫が好きだった。海のゴキブリと呼ばれる虫なのだが、逃げまどういのちは卑怯なだけに美しい。その一生懸命さを私は愛した。（新子座89）

山の子は山の風の音を聴き、野の子は稲穂を渡る風を聴いて育つんだろう。とすれば、私の風は河口にうねる波だったわけで、このことがどこかで私の精神構造の原点になつた気もする。（女）

私はふるさとぎらいである。そこには吉井川という名の川が一本流れているだけ。家もなければ友だちもない。

（新子座89）

穴ぐらで三十年、河川敷で六年、というのが私の過去の歳月であり、暮らしである。（言葉）

一人で志を立て、それを貫くということに甘えは禁物です。私は姉の厚意も長男のやさしさも拒否しながら、河川敷という特殊な環境の中で、私の詩魂をみがいていたのでした。

（愛）

私はとび箱のとべない女の子だった。だから飛んだの、その後の人生のすべてのとび箱を。ポケットの物ぜんぶ捨てたらとべたの。（大学）

「書く」ということでしか救われない環境を、他力は私に授けてくれたのである。謝して余りある運命であった。（世界）

私は泣き虫だから家の中が好き。家の中で鬼のふんどしを洗つているのが好き。（言葉）

ほんとうのつらさは真昼間に襲う。夜の孤独やつらさはそれに比べて平凡だ。（大学）

私が影響を受けた人たちに共通するものは、ある種のヤクザつばさであつたようだ。ヤクザは礼儀正しい。人情に篤い。一匹という意識に生きていた。ヤクザは約束を守る。いつでも狂える真面目さを持つている。何よりも強烈な個性を秘めている。もちろん私のいうヤクザはその辺のチンピラではない。大親分の立姿である。（花）

私は冗談が好き。水が好き。（遍路）

素直が服を着ているのが私。（大学）

短気は損氣。わたしは短気。（日常）

私は幼いころに祖母から聞いたのである。

「のう、太郎さんと呼ぶと太郎さんが来るわな。そのように、幸せを呼んでおればいつも幸せがくる」

「なるほど」と、幼なごころに思つて以来、忘れたことはない言葉だが、好きな言葉というのとは少しちがう。いわば私の人生訓みたいなものだ。（愛）

『新子』という句集は幻の句集として求められつづけている。『新子』は本ではなくて私が生んだ人間なのだから、病める人、悩みをもつ人、さびしい人、そういう「もののあわれのわかる人』たちに求められるのであろう。（花）

私は「樹になりたい」と思うことがあります。どこの地の、どんな木でもいい。木になれたなら、樹になる努力をしようと思つてゐるのです。何のために？　イジメられつ子と話をしたい一心からです。（大学）

私にとつては人間も花も虫も犬も猫も、すべてのものが平等なのです。同様に、あらゆる権威、また神や仏もまたともだちなのです。（展望）

私は四季にも日日の天候にも不満は一切感じない人間です。唯一の長所かも知れません。（大学）

私は照葉樹林の精である。生も性もおおらかにありたいと願いつつ、生きてゐる。（花）

私の息子はもうオッサンだが、一年に一、三回、私は息子とだけ会いたいと思うときがある。（大学）

私は読書がきらいである。本を読む時間があるなら、ぼけ一つと空や風を見ている。そのほうがずっといいのだから困つたものだ。（愛）

ひところ（今もまだ続いているが）、自分史ブームが起つた。しかし、誰でもハタと行きづまるのは自分の恥の時代である。そこが書けたら一億総作家になつているだろう。そして、その時代ほど懐かしいものはない。（新子座89）

もしもそうだとすれば、それは大地震のせいだったような気がする。この一年、確かに私の心理状態は尋常ではなかつた。未曾有の大震災をくぐり抜けたあの日から、何やら強勒

なバネが体内に装置されたようで、句もエッセイもこころな
しか弾んでいる。（新子座95）

無駄こそ女のアクセサリー。（大学）

春は半眼自堕落にやり過ごすにかぎります。（大学）

怒るときは怒らなきや。妬むときはころすほど妬まなきや。
せつかく生きているのだもの。（大学）

日盛りが若者のためにあるとすれば、夏の朝と夕は高齢者
のために天が与えてくれた時間のような気がします。（大学）

それにしても今の世に、「女人禁制」がまかり通つていい
なんて。今もまだ、「男児誕生」をよろこぶ気風が残つてい
い

るなんて。ローマへの道の遠さをつくづくと思う。（愛）

人は誰でも自分を不器用で無口と思っている。（人間）

猫の目のようにくるくる変わる運命のおもしろさ。

叶うことならこれからも猫のように生きていきたい。

誇り

高くしなやかに、どこか妖しく生きていきたい。（猫）

この「今」に感謝しながら。（展望）

ともかく八月十五日。私は今年も丘から天へ向かって花を撒く。それが私の鎮魂だ。（人間）

ゆらゆらと太古と未来を浮遊して茫々と消える一日一日をあなたは惜しいと思わないのですか。とにかく私は「今」を撒く。

生きたい。今を生きる人や動物や植物たちとともに。（人間）

独りなのだ、一人で生きなければ——と思うとき、人は倍の勇気が出るのでないだろうか。（女）

悩むとすぐに海へ走るよりは、人間の胸に飛び込んでみましょう。人は人によつてしか救われません。（日常）

人は落ちこみのはげしいとき誰にも会いたくないものだ。同情は屈辱であり怒りである。（指）

野放団なかなしみもいいね。（大学）

さくらんぼの樹はまだ知らないが、あの樹から朝は満腹の雀が一斉にとび立つのであろうと想うだけで私は不思議の国

のアリスになれる。（言葉）

人と人は並んでいると、ふしぎに敵対心がなくなる。（愛）

本音とは本心から出る言葉である。

どなたにしても本音とタテマエというのがあって、だから円満に人とのつきあいもできるのである。互いに本音をぶつけ合うのは、おとな生き方ではないだろう。（愛）

日帰りの旅ではどうということではなく、それぞれが時へ帰つていくのだが、一泊ともなればもう人の心や癖が目につく。いつのまにか自分の中で好きな人、嫌いな人を分類して、なるべく好きな人たちとグループを組もうとする。これは人間の自然な動きのようだ。（愛）

断念、ということを私は苦手としてきた。私が念を断たない限り事は成ると豪語した時代もあった。しかし生きるということは「かなしみ」を生きるのだと思えば、どこかで念を断つことは生者の知恵でもあろう。私はもぞもぞとふとんから這い出て、一つの念を断つたのである。窓が開いてカーテンを風が舞い上げた。（展望）

砂時計をひっくり返してまた三年。こんどはいい三年でありたいわね。（大学）

人間のしぶとさは生への執着とは少し違う気がしてならない。生と死のはざまで、人がしぶとく見えるのは、実は生きてもいざ、死んでもいないからではないだろうか。ということで、蛇は私に近い生きものである。（新子座90）

人間には三通りあつて、死ねば無に還るという人と、土になるという人と、天国へ行くという人に分かれる。(新子座89)

「驚く」という心の動きは新鮮である。

こうやつて驚くことをいっぱい残して、未練たっぷり新鮮なまま私は彼岸へ旅立ちたい。あちらにも驚くことがたくさんあるだろう。それを思えばわくわくする。(人間)

私が子供(特に幼い子)がこわいのは、本音のかたまりだからだ。
(愛)

急接近する人は急離脱する。(日常)

近所づきあいも恋の駆け引きと似ていてね。追えれば逃げる。物欲しそうな目は絶対禁物。まずは精神的に独立すること

す。（キラキラ）

人とトラブルがあつた時は、まずそこに自分が蒔いた種がなかつたかどうか顧みることが大事だと思う。もつと謙虚な気持ちで相手のいいところを見ようと思えば人間関係はうまくいきます。（キラキラ）

強烈な大きなデリカシーがなければ「勝手」というものは続かないです。精神的にいつもニコヤカであらねば、「いのち賭ける仕事」は出来ないので。（展望）

見回してひとり、これという特技もない専業主婦。キケンだ。とてもキケンだ。お節介だけれど「立ちなさい」と声を掛けたい。あなたの人生の分岐点だから。（大学）

“どうしてそんなに群れたがるの？ そこに入れてもらえなかつたからって、別にいいじゃない。よその人の目なんか気にせず堂々としていればいいのよ。（キラキラ）

一生懸命はいそがしいにつながる。いそがしいは「忙しい」と書く。心を亡くすることだ。一生懸命の手綱をちょっとゆるめると、ほら、小鳥が啼いている。蟬までがやさしい。ぼうっと暮らしたい願望は、もしかするとボケの前兆かも知れないが、それもまたよし。一生懸命はまわりの人も疲れさせる。（人間）

あんまり「がんばれ！ がんばれ！」と言われると、時に苦痛である。（大学）

堂々と泣き、めそめそし、ヒステリックになればよい。笑

う日はいざれ来る。（大学）

町の音つて生きている実感です。（大学）

私は指輪とオルゴールが好き。ところがこの二つはなぜか自分で買うとわびしくなるので困っている。（新子座89）

人には夢か現か、あの世この世の見境もつかなくなることがままある。それが人生のある一時期であることもあれば、一日のうちにさえ、そういう^{とき}刻は存在するように私には思われる。（遍路）

バカバカしいから「バカバカしい」とアンケートに返事。
(大学)

なぜきのうまで元気だった人が検査によつて病人になるのだろうか。（再婚）

ひまわりは嫌いな花よ油照り 新子

保育園や幼稚園に何とこの名の多いことでしょう。ひまわりは向日性の元気じるしの花だからだと思います。私は少女のころから元気な人をこわがりました。

元気な人はどうも思いやりに欠けるような気がするのです。人は心の翳りの部分で人の痛みを分け持とうとするのではないでしょか。ひまわりを見て いるだけで私は疲れます。

（言葉）

花のように自然につぼみ、ひらき、実を結んで枯れて静かに終わりたい。できれば虫のように死にたい。輸血や点滴でもよぶよの水死体のようにならず、からからに乾いて死にた

い。花や虫が一生懸命生きたように、まことを尽くして生きて死にたい。できれば、私が生きてきた微量の毒が積もり積もって、燐光を放つてくれると最高だ。（女）

更年期は通過してふり返るとなつかしい風景なのだが、トンネルのさなかにいるあいだはかなりしんどい。でも、更年期は成人病とちがつてかららず治るので楽しみだし、じつにふしぎな現象が起きるので人体実験と思えば面白いともいえる。（女）

つらい時、苦しい時の涙はきっと毒素なのね。（人間）

私は、つらい時にはとことんボロボロになろうと思つていい。また、つらい人には励ましたりせず、一緒に泣いてあげようと思っている。——毒素の涙で年を取り、そうして順に

死ななければこの世は人で満杯になる。（人間）

「沈黙は金」の時代は過ぎた。しかし、饒舌また金ならず。ピンポン玉のような会話を目指したい。相手の話の腰を折るのはペケ。（日常）

「もう聞いた。耳タコよ」と言う人は正直者だが、やさしさに欠ける。特に老人に対しても。（日常）

鳥ってかわいい。鳥って何と美しい。そう感じ始めたころから、私は人に対しても、うんとやさしくなれた気がする。

（新子座 89）

生きていれば「初めて」がいっぱいよ。もういいかげん世の中を見尽くした、知り過ぎた、と思つても、次から次と新

しい出会いがある。それって素晴らしいじゃない？（大学）

こころが年をとるのは何歳ごろか。個人差はあるだろうけれど、私など死ぬまでこころが若いのではないか、それなら死ぬときにさぞやもがきあがくだろうと心配だ。（新子座89）

日ごろから覚悟はしていても、人は死ぬ瞬間まで生に執着するものである。宣告と執行のいいだの時間が短いこと、それがせめてもの人間にに対する人間の思いやりというものではないのだろうか。（女）

「人に逢いたし逢いたくなし」「人間ぎらい人恋し」——みんなそうじやないかしら。（日常）

生きていれば、つい死にたがり、死に直面すれば十人が十

人生きたいと願うだろう。（大学）

生き残る人にとって、今まさに死なんとする人は、すべて敗者に映るものであるらしい。死者は、もしかすると永遠の勝者かもしれないのに、だれもそれを認めない。あたかも、自分は未来永劫死なないかのごとく、死んでいく人を見おろすのである。（女）

あの世ではみんなうしろ向き。誰一人振りむくことをしないで、すたすたと歩いて行くのだと私は思う。それは、こぎつぱりとしたうしろ姿であらねばならぬ、と強く願う。ゆえにこの世ですれ違う人を私は愛したい。（言葉）

死を思うとき、生はとつぜんやさしくなる。じやれる仔犬を抱きあげたり、駅の小さな花の鉢に微笑を投げてみたりす

る。（猫）

どんなにおん身大切にしている人でも死ぬときは死ぬ。生まれたときに定められたそれを知らない幸せに生きておれば必ずその時に会えるのである。心配は不要である。

うららかな死よその節はありがとう 新子

（言葉）

ねむろう。闇は大きなハンモック。四肢をのばすとどこかの骨が鳴つて「ごくろうさんだねえ」という。「仕方ないやね、私の選んだ道だもの」——やがてけだるい幸福が睡魔をつれてやつてくる。牛蛙の声も貨車の軋みも、いつからか降り出した雨の音もみんな私の子守唄である。神さま、いのちをありがとう。（言葉）

雑こそ人生の味ですわ。（大学）

『言葉たち』の胎動の中で

坂東乃理子

『言葉』というものは、人の心の奥で何十年も生き続けるもの——。新子語録を捨いながら幾度もそう思いました。

近くに住んでいたながら、なかなか先生にお目にかかる私は、もっぱら先生のご著書の中の「言葉たち」から、大きなパワーをいただいてきました。ノートに書きとめ、心に刻んできた「新子語録」が、「川柳大学文庫」として世に出ることとなつて、こんなうれしいことはありません。

北川弘子さんとの共編であることも心強いかぎりでした。弘子さんは主として「川柳に生きる」を、私は「愛と人生」を担当しました。もちろん下敷きの「全語録」は全著作をあたつて作りました。どの言葉を捨うか、限りあるスペースに採れる言葉をめぐって、弘子さんと話し合つたことも勉強になりました。お忙しいなか、ずっとサポートしてくださいました猿郎編集長、私の分まで徹夜でワープロを打つてくださった北川弘子さんに、改めてお礼を申し上げます。新子先生の「言葉たち」が皆さまに届くお手伝いができたことを、誇りに思います。ありがとうございました。

『言葉たち』の蒐集を終えて

北川弘子

今回はからずも、新子先生の語録集を担当させて頂くことになりました。

先生の書かれた厖大な言葉に、朱線を引き、いざ鉄を入れようとすると、言葉たちがきっとスクランブルを組み、バラバラにされまいとして私の前に立ちはだかってくるのです。

目に見えない強靭な意志を感じて、身が震えてしまったというのが正直な感想です。

「川柳はいのち」と断言される先生のいのちは、死を超えるいのちだったのだ。その上で「今」を華やかに生きる。常に峻厳として、歴史や過去に一切捉われない先生の在り方が少しあわかつたように思います。

この語録は先生の「今」、「今」の累積です。先生はきっとこの「今」をこれからも吐きつづけ、積みつづけられることを信じます。

『言葉たち』パートⅡやパートⅢが出版されることを心からお待ちしつつ、よきパートナーの坂東乃理子さんと、教え支えてくださった曾我碌郎先生にこの場を借りてお礼を申しあげます。
ありがとうございました。